

近藤邦康著

毛沢東 実践と思想

岩波書店／2003年7月／468頁／7350円



砂山幸雄

まえがき

最初に個人的な思い出を記すことをお許しただきたい。約二〇年前、博士課程在学中だった評者は、本書『毛沢東 実践と思想』の著者、近藤邦康教授が大学院で行なっていた授業に出席し、当時ようやく入手できた毛沢東の『倫理学原理』批注（一九一七—一八年）を輪読したことがある。一九世紀末のドイツの倫理学者パウルゼンの原著を蔡元培が日本語訳から重訳したテキストの余白に青年毛沢東が書き込んだモノローグのような断片を、テキストと対照しながら読みすすめることは、師楊昌済のもとで『倫理学』を読んだ毛沢東の学習過程を追体験するような気分を感じたものだ。本書では、初期毛沢東の思想形成を知るうえでこの「批注」が特に重要な位置を占めている。著者の知的関心の強固な持続性を感じ取った。

もう一つの思い出は六年前。仕事で一年間北京に滞在していた評者は、在外研修で北京におられた近藤教授と比較的頻

繁に接する機会に恵まれた。近藤教授は毛沢東についての近く刊行される予定の著書の原稿を抱えておられ、中国の老・壮・青の各世代を代表する研究者たちと意見交換をしながら、その完成をめざしておられた。評者は、教授からそうした意見交換の一端を時折紹介していただいたが、建国以後の部分がなかなかうまく書けないと漏らされていたことを思い出す。市場経済化の大波のなか、毛沢東時代の面影が日増しに薄らいでいく中国で、毛沢東の実践と思想の歴史的意義を確認しようとする教授の真摯な姿は、評者には深い印象として残っている。本書はその時からさらに四年を要して完成したことになる。

これまで著者が研究対象としてきた中国近代思想史上の主な顔ぶれ——譚嗣同、章炳麟、李大釗、楊昌濟など——を眺めれば、著者がその総仕上げとして毛沢東と格闘するにいたったのはほとんど必然ともみなせる。その意味でも毛沢東研究は著者のライフワークであり、本書がその集大成の位置に置かれることは言

うまでもない。しかし、それだけに、これまで著者の語ってきた毛沢東像に感じていた違和感や疑問点が、本書を読むことによつてよりはつきりしてきたこともまた確かである。著者のこれまでの研究から多くを学び、また本書の完成までの道程の一端を垣間見てきた評者にとつて、本書を評することは、たんに一冊の書を評する以上に荷の重い課題であることとを、あらかじめ告白しておきたい。

一 本書の構成と著者の基本的な視点

本書は、青少年時代から晩年にいたるまでの毛沢東の思想の形成・発展を、その実践活動とともに時代を追って辿っている。全体は中華人民共和国建国を境に第一部「革命者 毛沢東」と第二部「建設者 毛沢東」の二つの部分に分かれるが、巻頭の「はじめに」で基本的な分析視角が、また序論「中国近代」では「救亡」と「民主」とを柱として整理された中国近代思想史の見取図が提示されている。最後の「結論」では全体の要旨と

「毛沢東における思想課題」が整理されている。以下では「まえがき」を中心に、著者の基本的な視点を紹介しておこう。

著者は、毛沢東の思想を「二時代を生きた個人の思想として、一つのものとして把握することをめざす」(vi頁)と宣言して、体制イデオロギーとしての「毛沢東思想」とは異なる、毛沢東その人の「思想」を一貫したものとして捉え、描き出すことを課題として掲げている。毛沢東には生涯を貫く何かがあると人思わせる強烈な個性がある。そのため、革命家毛沢東と建国後の政治家毛沢東とに共通するものをとり出そうとする試みは少なくない。たとえば、本書と同時期に同じ出版社から翻訳が出たジョン・スペンスの簡略な毛沢東伝——本書とは対蹠的に、文字通り生身の男を描いた——は、中世ヨーロッパの「無秩序の王様」のならわしに、毛沢東の政治行動解のヒントを得ているし、古いところでは政治学者ルシアン・バイが、少年時代の父との葛藤という心理学的要素を軸と

して特色ある毛沢東論を書いた。⁽¹⁾だが、本書はそうした「タネあかし」的な類書とはまったく異なる。本書の価値はなにより、毛沢東の「思想」の核がどのように形成され、それが革命と社会主義建設の実践のなかでどのように成長、展開していったかを、終始一貫丹念なテキスト解説を通じて追究しようとした点にこそある。だから、この毛沢東の思想的核心とはかかわりが薄いとみなされるもの(例えば、ジェンダーの問題、少数民族の問題、あるいは毛沢東のパースナルな部分の問題など)は完全にネグレクトされている。本書に新しい切り口を期待する者は裏切られるかもしれないが、これはこれで一つの確かな態度だと思う。

著者はまた、分析の視点として次の三点を設定したと述べている。(1)「中国近代と毛沢東」という視点。中国の近代を「救亡(国家・民族を滅亡から救う)―民主(人民を君主の統治の客体から革命の主体に転換する)」の過程ととらえ、そのなかでの毛沢東の位置と役割を説明する。(2)「中国思想史と毛沢東」という

視点。旧中国の思想・体制を「価値転換」して新中国の思想・体制を創出するという毛沢東が持続して行なってきた作業を説明する。(3)「中国社会主義と毛沢東」という視点。毛沢東がソ連社会主義から吸収したもの、またその運用の中からのようにして中国独自の社会主義を作り上げたかを考察する。そして、これはきわめて独特のスタイルだと思われるのだが、著者はこの三つの視点それぞれについて、自身が強く影響を受けた先輩・同僚の観点・概念を明示し、それらをそれぞれ毛沢東の実践と思想の分析のために「継承」し、あるいは「応用」すると宣言しているのである。具体的には、(1)については竹内好の「抵抗」の視座を、(2)については西順蔵による「人民」と「実践」への着目を、そして(3)については和田春樹の「世界戦争に備える新しい総力戦体制」としての「国家社会主義」という概念があげられている。この三者はいずれも個性的な思想家なしいし研究者であるが、彼らの思想や概念は実際に著者によって解釈されたかたちで本

書の随所に分析の支柱として活用されており、それが著者の毛沢東論に独特の特色を添えている。

こうした方法を通じ、著者は毛沢東の思想の核心を、「帝国主義に対する外部からの「絶対批判」としての「人民」、矛盾、大同(共産主義)」に見出ししている。すなわち、「毛沢東は外からの侵略に抵抗し、内の束縛(「網羅」)を突破(「衝決」)して人民が自らの力量を発揮する、国家独立と人民革命を結合する、という根本思想において一貫」していたとする(vi頁)。そして「人民」理想主義と「実際」現実主義をねばりよく結合する態度を革命期だけでなく建設期にも貫き、「軍事・外交の領域では両方面を適切に結合したが、経済と文化の領域では乖離して困難に陥り、再結合に力を注いだと見る」(vii頁)。毛沢東の思想は、「救亡」と「民主」の二つの課題を結びつける思想として中国革命を勝利に導いただけでなく、社会主義建設期においても大きな役割を発揮した。経済建設と文化分野で問題が生じたが、それも

「人民」理想主義と「実際」現実主義の乖離から生じたものであり、最後までその「再結合」に努力したというのである。

これを毛沢東の歴史的評価とするならば、大躍進の失敗や文化大革命の悲惨を毛沢東個人の誤りに帰した中国共産党の「歴史決議」（一九八一年）より毛沢東に「甘い」といえそうだ。著者は「中国共産党の集団の知恵の結晶」としての公定「毛沢東思想」には飽きたらず、「毛沢東思想に対する後年の整理や理論化よりも、可能な限り毛沢東の当時の文章・発言や行動や事実に直接ぶつかって、毛の実像に迫ることを意図した」（xv頁）と述べ、実際、『建国以来毛沢東文稿』全一三冊を含め、利用可能な毛沢東の著作は網羅的に利用している。また近年中国でも目立ち始めた毛沢東神話を打破するような実証的研究（楊奎松、高華ら）の研究も本書ではかなりの程度ふまえられている。しかし、それにもかかわらず、本書では建設期においても毛沢東の思想への高い評価は基本的に揺らいでいな

い。

評者は、著者が把握した毛沢東の思想とは、「一時代を生きた個人の思想」というより、革命・建設の両方の時代にまたがり中国人民に「物質的力」となつて作用した「毛沢東思想」を、中国共産党の公定バージョンとは別個に、著者が独自の視点から再構成したものと考えた方がよいのではないかと思う。それはときに、かくあるべしと著者が願望する思想境地としても立ち現れ、その高みから現実の毛沢東の選択に対する批判をも可能にしている。ソ連史家内田健二が、この書を「真正」毛沢東思想による毛沢東批判²⁾と評したのは、言い得て妙である。別の言い方もできる。著者は、かつて竹内好が、アジアが西洋に抵抗しつつ西洋の文化価値を東洋の力によつて「包み直す」、文化的に「巻き返す」、そういう「主体形成の過程」としては、ありうるのではないか³⁾として提起した「方法としてのアジア」という考え方を自覚的に継承し、毛沢東の「人民、矛盾、大同」のなかに一つの具体的な「方法」を見出

そうとしたと思われる。本書はこの「方法としての毛沢東」像を実証的に彫琢しようとしたものであり、それは特に、毛沢東の晩年に至つて「実体としての毛沢東」との乖離を大きくしたのである。以下に本書の趣旨とこうした性格がはらむ問題点とを、「革命」期と「建設」期の論点に則していくらか考えてみたい。

二 第一部「革命者 毛沢東」について

第一部は、第一章「農民出身知識人の五・四運動（一九三三—一九二二）」、第二章「農民の革命—国民革命とソビエト革命（一九二二—一九三七）」、第三章「民族の抵抗—抗日戦争（一九三七—一九四五）」、第四章「人民の解放—人民解放戦争——と中国革命の展開に沿つて毛沢東の思想形成・発展が語られている。この第二部を構成している重要なモチーフは、「精神の個人主義」と「民衆の大連合」という第一章で提示される初期毛沢東の二つのフレーズであろう。

「精神の個人主義」とは冒頭に言及し

た『倫理学原理』に書きつけられたものである。毛沢東は著者パウルゼンの主張に共鳴して「充分に自己の身体及び精神の諸能力を發展せしめ、最高に至らしめる」ことこそ「人類の目的」であり、「身を殺して仁をなす」という利他の行為も利己の一段ととらえて、この言葉に包括させた(三一頁)。著者はこれを毛沢東の「徹底した個人主義」と捉え、三綱を否定した譚嗣同、「吾を主とする」ことを説いた楊昌済を継承し、また五・四新文化運動の「個性解放」の精神であるという(二八頁)。この「精神の個人主義」は、マルクス主義の受容を経て、抗日戦争中に書かれた「実践論」のなかの「実践能力と認識能力を無限に發展させる〔主観能動性〕」(一〇五頁)へと發展し、さらに党員に各個人の能力をできるだけ發展させて「党派性と個性とを統一すべきだ」と説いた一九四五年の「連合政府論」にいたる。著者はこれを「毛沢東の思想の起伏における個性・自由を最も強調した頂点」と評する(一五五頁)。

確かに毛沢東には生涯を通じて、個人の能力やエネルギーを解放し、最大限に發揮させようというモチーフがつきまとう。大躍進然り、文革また然り。だが、この毛沢東の「精神の個人主義」は、西洋的な個人主義や自由主義とどのような関係にあるのであろうか。著者は、毛沢東がパウルゼンとの「格闘」のなかで、「自然が精神に優越し全体が個体に優越する中国思想の内部で、精神と個体を最大限に發展させる宇宙観・人間観を構築した」(三三頁)とも述べて、その中国的特質を示唆している。五四「啓蒙」の洗礼にもかかわらず、毛沢東は結局のところ、そうした中国思想の枠組を突破することなく、「個人・我」を一挙に「民衆・われわれ」に「拡大」し、「全体人民一人一人が「精神の個人主義」を実現する場」(三七頁)としての新社会を構想したのではないか。これはホーリズム(全体論)的社会観と対決してきた西欧個人主義とは、根本的などころで相容れないものだろう。

著者は「結論」において、「精神の個

人主義」や「主観能動性」などに見られた「人格独立」の思想の萌芽」について、「建設期にこれを「個人自由」原理に發展させ、「人民平等」原理、「共産党の指導」原理と鼎立させて、新たな社会主義を構築する、という可能性はなかったか」(三八二頁)と自問している。しかし、仮にそのような「鼎立」がありえたとしても、その「個人自由」とはどのような「自由」か、依然として大きな問いが残るに違いない。評者には、毛沢東の「精神の個人主義」という境地は、かつてベンジャミン・シュウオルツが嚴復のスペンサー理解について指摘した「人間の自由を個人の「能力のエネルギー」の解放として捉える自由概念」に近似して見える。しかし他方、それは「独戦」のなかで「庸俗」な「群体」な「団体」に対する不信感が大きな役割を果たした」と汪暉が指摘している魯迅の「個性性原則およびそれから生じた人の独立性、自由に対する理解」とは、異質であるように思える。

革命期のもう一つのモチーフ「民衆の

「大連合」はどうか。言うまでもなく「民衆の大連合」（一九一九年）は湖南の五四運動の高揚の中で書かれ、ボルシェビズムの「激烈な方法」を排し、クロボトキン流の「温和な方法」による変革を訴えたものである。著者は、このなかの「世界で何の力が最強か。民衆連合の力が最強である」という有名な一句に象徴されるような民衆の潜在力に対する信頼を「人民」理想主義」と表現し、「多数民衆は必ず少数強権者に勝利する、というこの単純な信条を一生涯保持した」という（三六頁）。また、農民、工場労働者から学生、女性、警察官、人力車夫にいたるまでの民衆の「小連合」を下から積み上げて「大連合」を形成するという「方法」に関しては、毛沢東は中国人の「大連合する能力」に疑問を抱きつつも、圧迫に反抗するなかでその弱点を克服できると考えた。著者によれば、この「民衆の大連合」の思想も、楊昌濟の「民を主とする」を継承し、のちの「大衆路線」へと発展するものであるという（四八頁）。

五四運動からマルクス主義の受容への過程には、思想的に発展的継承と断絶の両面がある。かつての革命史観が前者を強調したとすれば（例えば、五四の先進的知識人が政治的、思想的に目覚めてマルクス主義者になった、というように）、一九八〇年代半ばの李沢厚「啓蒙と救亡の二重変奏」論の大きな影響もあり、現在ではむしろ「啓蒙」における断絶面に関心が集まるようになったといえる。これに対し、著者が発展的継承の立場に立つのは明らかだが、マルクス主義受容によつて毛沢東のそれ以前の思想が発展的に解消されたわけではないという独自の視点を主張する。すなわち「新しく受容した暴力革命の思想、革命・独裁の方法が矛盾の主要方面となり、その優位の下で、これまでの平和革命の思想、教育の方法が次要（第二に重要な）な方面となり、自らの内部で矛盾をもちこたえて、その間を揺れながら前進したと考えられる」（四六頁）。まさしく、毛沢東の革命の魅力のひとつは、激烈な闘争の中でも、しばしば「病を治して人を救う」と

いう教育的方法が用いられ、敵をも取り込むことを可能にしたことにある。それが、五四「啓蒙」の精神のある面を継承していることもたぶん確かなことだろう。

だが、毛沢東は革命・建設の両時代を通じて、同じく「教育的方法」を用いながら、それと表裏して剥き出しの権力を荒々しく行使することをもあえて辞さなかった（あるいは黙認した）のではなかったか。延安整風運動とその陰で展開された「抢救」運動、「双百」から「反右派」への転換、それに何よりも文化大革命が、そうした事例となるだろう。これらには「矛盾をもちこたえて、その間を揺れながら前進した」という表現では済まされない、ある種の不可分性を読み取るべきではないのだろうか。著者もおそらくこの点に気づいている。例えば、延安整風運動に関する高華の研究について、「毛沢東は、『道』（思想・理念－毛沢東思想）、「術」（策略、方法－党員・人民を統御する権謀術数）、「勢」（地位・権力－最終決定権を持つ政治領袖・

思想導師)を一つに融合する、韓非子の「中国古代政治術」を運用したという説がある。問題点を鋭く突いていると思われる(三九六頁)と書き、さらに「その後も「大衆独裁」が行われ、拷問が行われて、暴力の恐怖によって全党が毛沢東の権力・権威に慄伏したと言われる(三九八頁)」と書いている。しかし、これらはいずれも注に記されたにすぎない。こうした権力(独裁)と文化(教育)との抜き差しならない関係について、本文中で十分に議論を展開してほしかった。

本書のなかで分析がもつとも躍動しているのは、抗日戦争の時代、毛沢東が日本軍、蒋介石・国民党、ソ連・コミンテルン・王明派といった外敵やライバルたちとの厳しい闘争・駆引きのなかで、その思想を深めていった過程を描いた第三章であろう。中国共産党は「反蔣抗日」から「逼蔣抗日」への転換によって軍事的劣勢を政治攻勢へと反転させ、「蒋介石の上からの国家統一を毛沢東の下からの人民民主によって押し返し」て合作を

最後まで維持させ、抗日戦勝利に導いた。その過程で、毛沢東は「マルクス主義を中国の具体的環境の具体的闘争に応用する」ことを主張して、王明との思想闘争に勝利し、やがて整風運動を通じて党内における最高領袖としての地位を確定し、黨員の間に思想統一を図った。著者はこうした経緯を丹念に辿りながら、そのなかで書かれた「実践論」「矛盾統一法則」「新段階論」「新民主主義論」など一連の著作の意義を検討している。それらをいちいち取り上げるゆとりはないが、「実践論」について著者の分析などを読むと、この時期の毛沢東の思想的営みとは、抽象的理論問題であっても、まさに現実の軍事・政治闘争を勝ち抜くための思考の武器を鍛え上げることであったという印象を深くする。文字通り「実践―認識―実践」の循環である。それらがマルクス主義の認識論・矛盾論として正しかったかどうか、毛沢東の創見であったかどうかということは、評者には論じる資格はないが、少なくともこの時期の毛沢東を評価する主要な基準ではあ

るまい。本書を読む限り、毛沢東の革命家・政治家としての能力が最も精彩を放ったのはこの時代であったように感じられた。

三 「第二部 建設者毛沢東」につ いて

第一部に比べると、第二部の叙述は毛沢東の思想についての分析より、中華人民共和国政治・外交史といった趣きが前面に出ており、中国の最高指導者としての毛沢東の発言や政策決定にたいし、著者が理解した毛沢東の思想あるいは中国革命の理念の角度から解釈や批判が下されるというスタイルをとっている。そのため、どこまでが思想の領域で、どこからが政治や経済の問題か、またそれが毛沢東自身の考えなのか、毛沢東を含む中国共産党指導部全体の意思なのか、しばしば頁を捲る手を止めて考えさせられた。

第二部の特色の一つは、中国の社会主義体制を、和田春樹が提起した「世界戦争に備える新しい総力戦体制」としての

「国家社会主義」概念に大きく依拠して理解し、分析していることである（viii―ix頁）。それは、第一章「朝鮮戦争と社会主義改造（一九四九―一九五六）」、第二章「中ソ論争と社会主義建設（一九五六一―一九六六）」、第三章「ベトナム戦争と文化大革命（一九六六一―一九七六）」という構成からも窺うことができよう。

著者は、毛沢東の中国にとって「救亡」という課題は、建国以降も世界戦争の危機となつて継続し、米中和解、日中国交正常化、さらにベトナム戦争終結によつてようやく終わった、と考へる（三六四頁）。世界戦争の可能性という対外緊張をはらんだ時代にあつて、中国はソ連から党・国家・社会が一体化した集権政治、計画経済、マルクス・レーニン主義の国教化などを内容とする「国家社会主義の骨組」と、「急速度工業化と農業集団化を推進し、左右の異論を党内闘争によつて処理する」ことを特徴とする「社会建設のスターリンモデル」を導入した。これに対し、毛沢東が付け加えたものとは、この国家社会主義を「人民戦

争方式で運用する、上と下からの「二本足で歩く」毛沢東モデル」を編み出したことであるという（三七四―三七五頁）。著者は国家社会主義の制度と建設モデルの中国への導入という事実を、体用論的に捉えたわけである（「ソ体中用」とでも呼ぶのだろうか）。その上で、著者は中国の社会主義建設が「独立した工業体系と国民経済体系を築いた」ことを成果とする一方で、広範な被害者・犠牲者を生み出した反右派闘争、大躍進、文化大革命の「代価を直視するほかない」と述べる。これらの見方に、大筋異存はない。

だが、こうした成果と代価とを生み出すにいたつた主要な要因は、それぞれ「体」「用」いずれにあつたのか。著者は毛沢東の功績と誤りはいずれもスターリンのそれと対応しているとしており（三七五頁）、そうであるならば、「運用」面の毛沢東モデルが果たした「成果と代価」はどう評価すべきなのだろうか。本書第二部では、「反右派闘争への転換について」社会主義制度を防衛しようとし

て、国家と人民の関係について国家に偏倚した（二五八頁）、「反右派闘争で」左と右のバランスが崩れて片肺飛行となり、大躍進で他の一翼も農民に過大な期待をかけて、暴走し挫折した」（二六五頁）、「文革を推進した方法は、自己破壊的で自滅的であつた」（三三二頁）など――「建設者毛沢東」に対する厳しい見方が各所に示されている。「結論」の末尾では、建国後のいわゆる「社会主義の道と資本主義の道との矛盾」について、「実は人民戦争方式で運用する国家社会主義である根拠地社会主義、すなわち公社（コミュニティ）社会主義の道（毛沢東）」と、新民主主義に傾斜する国家社会主義の道（劉少奇）との矛盾ではないか」と述べられており、新民主主義的な「運用」の可能性も残されていたことを認めている。いけなかつたのは、毛沢東がこの矛盾を「人民内部の矛盾としてでなく敵我矛盾として処理した」ことであつて、そのために矛盾が激化し、莫大な犠牲をだした（三八四頁）。しかし、この毛劉矛盾は「人民内部矛盾」として

どのような「処理」が可能だったのだから。可能だったとすれば、それをなお「毛沢東モデル」と呼びうるのか。それとも「劉少奇モデル」になるのか。しかも、そのすぐ後で今日の中国共産党のいう「社会主義初級段階」論とは「新民主主義」のことではないかと述べながら、現在の中国が「全国人民共同富裕」実現のため「二本足で歩く」毛沢東経済発展戦略を継承発展する必要性も訴えている。著者の毛沢東への強い思い入れが、論旨の一貫性を損なっているような気がしてならない。

もつとも、上述の疑問は、著者の本領である思想領域には本来属さないであろう。「革命者」毛沢東から連続する思想の問題として、評者もつとも気になるのは、一方で和田の「世界戦争時代の国家社会主義」概念によりながら理解された中国社会主义と、他方で「人民、矛盾、大同（共産主義）」を思想的核とし、「人民」理想主義と「実際」現実主義を結合して革命・建設を推進するといふ「毛沢東の思想」とが、はたしていか

なる関係を切り結ぶのかという問題である。著者は、この両者を接続するために毛沢東自身にほとんど超人的な役割を与えている。すなわち「人民平等」原理（ヨコの組織）と「党の指導」原理（タテの組織）からなる中華人民共和国の指導者としての毛沢東の権力は、次のように描かれる。

「毛沢東—共産党—人民大衆」循環構造（根拠地時代に成立した大衆路線に関する著者の見方—引用者）を、根拠地から国家に拡大して、政治領袖・思想導師である毛沢東自身が要となつてヨコとタテの両方面の均衡を取り、人民が主体となり、主観能动性を発揮して、不断に矛盾を認識し実践により解決して、「大同」に向かつて前進する大衆運動と、共産党が人民大衆の意見を集中して方針を立て、人民大衆を指導して方針を実行させる大衆路線とを結合しようとした。かつての儒教・王朝に代わつて、マルクス主義・共産党が中国統一の普遍原理となつたの

である。旧中国の「君—臣—民」選流構造と形式は相似し、内容はそれを転倒することになった。（二〇八頁）

これは、毛沢東に仮託された中国の最高権力についての理念型と呼ぶほかあるまい。軍事共産主義的総力戦体制を建設・維持しながら、同時に帝国主義に対する絶対批判としての「人民」理想主義と「実際」現実主義とを結合させ、「人民、矛盾、大同」を敢行すること——こうしたことは、超人的能力と絶対的権威を兼ね備えた人物を想定しなければ実現を望めないであろう。だが、この理念化された毛沢東が、生身の毛沢東の実践によつて次々に裏切られていくのは、ほとんど必然ではなからうか。著者は「真理の体現者という絶対的な重い役割を担ったことが、相対的な生身の毛沢東個人に対する異論・批判を真理に対する攻撃とみなして、過剰に敏感に受け止め、過剰に反撃するという結果をもたらしたと考えられる」（二三六頁）と述べているが、仮にそうした批判・異論が無かつた

としても、この「真理」は現実から絶えず挑戦を受け、あちらこちらで破綻を示していたのではなかっただろうか。理念のなかの「人民」と現実の人民とが齟齬をきたして、前者が後者を抑圧した例は、毛沢東の時代においても枚挙に暇がない（退社騒ぎ、反右派闘争、第一次天安門事件……）。だが、一九六六年一月、劉少奇・鄧小平が自己批判した党中央工作会議について「このあたりが「毛——党——人民」循環構造の力量の限界であつたのではなかったか」（三四一頁）と語り、また最期の年の「毛主席重要指示」について「三線建設の経験を総括して革命と生産を結合する具体的方法を提示することをしなかつた」（三七一頁）と書いているように、あまり明確ではないものの、著者自身も理念（内田健二のいう「真正」毛沢東思想）の限界や挫折を語っているように思われる。

第二部は毛沢東生前の重要な出来事のひとつを扱っているが、著者の分析の特徴がもつとはつきり表れるのは、やはり文革にかかわる部分であろう。著者

は文革の動機をあくまでも「理念」に求める。文革は、毛が一九六二年に提起した「修正主義の防止、世界人民の革命闘争の支持、共産主義への移行」（三一七頁）という課題をそのまま引き継いでものであり、毛沢東思想学習運動も、劉少奇との党内闘争も、ベトナムへの支援、人民戦争の準備もそうした理念的動機に裏打ちされたものであったことを強調する。その中で、文革の理念を最も鮮明に語った「五・七指示」を分析し、「軍事共産主義と「農業ユートピア」の混合」であり、大躍進と比べて「全民皆兵の色彩が一層濃厚」であり、「生産物の豊富」⇨経済成長を具体的に言わず、人の思想改造を一層強調した、「国家とコミュニティの関係を説明せず、「運動論ないし制度論として不完全である」（三二八頁）など、文革の性格を端的に言い当てる興味深い指摘もある。

だが、近年実証的な研究が進み、地方や単位における権力闘争、およびその社会的背景の実相が少しずつ明らかになってきた文化大革命について、本書のよう

におよそ権力動機をミニマムにしき位置づけのない見方は、文革全体に対してはもとより、毛沢東の思想の分析としてもいささか物足りなく感じるのは私だけではないだろう。劉少奇打倒をめざした党内闘争について著者は、「劉の調和論と官僚主義を打破して、自らの「宇宙矛盾——人の実践」の哲学を回復し、毛自身が要となり、人民の大衆運動と共産党の大衆運動を結合する「毛——党——人民」還流構造を再建することを意図したと考えられる」（三二五—三二六頁）という。だが、毛劉対立のきつかけとなった社会主義教育運動には、毛沢東と劉少奇の路線対立を裏付けるほどの明確な違いはなかつた、毛沢東は劉少奇がこの運動を指導して「国家幹部百六十万人を動員した「そのエネルギーの大きさ」に驚き悩んだ」（三二二頁）という見解もある。

このように劉少奇の大活躍を自らの権威への挑戦と受け止めたことが文革を発動する重要な動機の一つだったのだとすれば、「思想（教）の導師としての権威を高めて政治（政）の領袖の権力を奪

選し、後継者を劉少奇から林彪に取り替えて、「政教一致」の回復を図ったと思われる」(二二六頁)という著者自身の見方をもっと展開していただきたいところである。ここには中国における権力の性格を考える上で、十分興味深い思想的テーマが含まれているのではないか。

おわりに

毛沢東の一生涯について、オリジナルの資料に基づき検証しながら、その実践と思想を一貫性あるものとして再構成する。これは並大抵ではない課題であった、著者の力技ともいふべき作業にはただ敬服するほかない。いささか残念だったのは、中国で中央文献出版社版、上下二冊の浩瀚な『毛沢東伝 一九四九—一九七六』が出版されたのが本書刊行の直後であって、少なくとも事実の整理という方面でこの書を利用できなかつたのが惜しまれるところである。だが、独断的な言い方を許していただければ、前述したとおり、本書は竹内好の「方法として

のアジア」の視点を継承し、毛沢東を要として「主体形成の過程」にあると見えた中国を描いた一つの「方法としての毛沢東」ないし「方法としての中国」の書である。「近藤毛沢東」に対する上述の評者の疑問点は、「実体」としての毛沢東という視点から発されたものによらず、著者の毛沢東研究に対する志とは、本来すれ違つてしまうのかもしれない。ただ、評者は、現在の中国研究や毛沢東研究において重要なのは、やはり「実体」としての中国、「実体」としての毛沢東のほうであると思う。

毛沢東時代のイデオロギーの実質的内容をほとんど否定してしまつた今日の中国——それは「世界戦争の時代」は終焉した、「平和的台頭」の時代であると宣言した中国でもあるのだが——に対し、この「近藤毛沢東」が提起するものとは何であろうか。汪暉を中心とする「新左派」とよばれる知識人のなかには、毛沢東時代を西洋的「近代」に対する批判の糸譜に位置づけようとする見方がある。また、毛沢東時代を直接体験していない

若い世代の中に、腐敗もなく人びとが平等であつた毛沢東時代がよかつたという声もある。これらの人びとはそれぞれが本書から重要な示唆を得るだろう。また、今日なお外国の軍事的、政治的、経済的圧迫の下に置かれている国・地域の人びとは、毛沢東の「人民、矛盾、大同」という絶対批判の思想に強い共感を覚えるかもしれない。だが、戦後六〇年間、外国軍隊の駐留という状態をもちや異常とも感じなくなつてしまつたこの国の人びとが、毛沢東の思想に再び注目するようになるのは、いつのことであろうか。

注

(一) ジョナサン・スペンス著、小泉朝子訳『ベンギン評伝双書 毛沢東』岩波書店、二〇〇二年(原著は一九九九年) Lucian W. Pye, *Mao Tse-tung: The Man in the Leader*, Basic Books, New York, 1976.

(二) 内田健二「書評」『HCPS ニューズ・レター』(大東文化大学国際比較

政治研究所) No.13、二〇〇四年三月、一五頁。この書評は近藤教授からお送りいただいた。

(3) 竹内好「方法としてのアジア」

『竹内好評論集』第三巻、筑摩書房、一九六六年、四二〇頁。

(4) ベンジャミン・シュウォルツ、平野健一郎訳『中国の近代化と知識人

——敵復と西洋——』東京大学出版会、一九七八年、七二頁。

(5) 汪暉「個人観念の起源与中国的现代認同」『汪暉自選集』広西師範大学出版社、一九九七年、二〇五頁。

(6) 著者は李沢厚の「啓蒙—救亡—テーゼ」(啓蒙と救国の二重変奏)、坂元ひろ子・佐藤豊・砂山幸雄訳『中国の文化心理構造』平凡社、一九八九年、所収)を含む李沢厚の分析と提言について、「まことに貴重」としながらも、「封建主義から資本主義へ、さらに社会主義へ」の発展段階だけを言って、「帝国主義と民族解放運動・発展途上社会主義国」の矛盾を言わないこと」などの不満を述べている(xiii頁)。

(7) 高華「北京政争与地方——积読『江渭清回憶録』(二十一世紀)一九

九八年四月号(総第四六期)。著者は本文中にこの論文を引用しているが、同論文の趣旨は著者の視点と対蹠的である。

(8) 本書は既に金冲及が序文を寄せた中国語版が出版されている。宋志勇他訳『毛沢東 革命者と建設者』中国青年出版社、二〇〇四年。

(9) 汪暉、拙訳「グローバル化のなかの中国の自己変革をめざして」『世界』一九九八年一〇月号、一一月号、一二月号。